

歩けアイメイト

盲導犬に賭けた三〇年

東京盲導犬協会理事長
塩屋賢一 著



東洋経済新報社

東洋經濟新報社

歩けアイメイト

盲導犬に賭けた三〇年

塩屋賢一 著

著者紹介

大正10年12月長崎県に生まれる。昭和19年3月官立東京高等工芸専門学校(現・東京工業大学)通信科卒。日本電子工業(株)に入社。同社解散で23年6月塩屋愛犬学校を開設。32年夏、盲導犬国産第1号チャンピオンを完成。46年10月財団法人・東京盲導犬協会を設立。同理事長、現在に至る。この間44年4月東京都知事表彰、54年12月厚生大臣表彰を受ける。
現住所 東京都練馬区関町1の136

口絵 中川宗弥

昭和7年3月生まれ。31年東京芸術大学油絵科卒。さし絵として「ノンちゃん雲に乗る」(石井桃子著)、童話作家の李枝子夫人との共作「子犬のロクがやってきた」など多数。

歩けアイメイト

定価 1000 円

昭和56年10月10日 発行

著者 しおやけんいち 塩屋賢一
発行者 中井義行

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社
郵便番号 103 電話03(270)4111(大代表) 振替口座東京3-6518

© 1981 <検印省略> 落丁・乱丁本はお取替えいたします。 0000-0486-5214
Printed in Japan

序文

一年ほど前「徹子の部屋」に、随筆家の福沢美和さんと愛犬のフロックスに来ていただいたことがありました。福沢さんは、今度お札おがきになる福沢諭吉の曾孫に当たる方で、四年前から盲導犬を使っている方です。それまで私は、盲導犬はとても利口な犬である、とは聞いていましたが、実際に見たのは初めてでした。

少し暑いスタジオの中で、福沢さんと話をしている間、たくさんのカメラに囲まれながら、かわいい顔をしたフロックスは、じっと伏せたままで、大変お行儀よくしていました。この犬が福沢さんの「目」の役目をはたし、どんなところへも出掛けるといふ話を伺って、改めて感心しました。フィルムに写った

フロックスは、とても上手に、路上に置いてあるポリバケツや植え込みをよけ、また、階段の上り下りを誘導していました。その度に私は「わあ、お利口ね」と叫んでしまいました。

もちろん、盲導犬がいくらお利口といっても、主人が「きょうは銀座へ行きたい」と言って、連れて行ってくれるわけではありません。主人が頭の中に地図を描き、それに従って四つ角、階段など、ポイント、ポイントで、犬に命令しながら歩き、目的地に行くのです。この「仕事中」は、主人以外の人が、犬がかわいいからといって手を出したり、口笛を吹くことは、犬の気を散らし、主人を危険な目に遭わすことにもなりかねないと伺ったことも、ありがたいことでした。

また、盲導犬は電車の中でかりに尻尾を踏まれても、決してかんだり、うなったりしないように厳しく訓練されているというのも、びっくりしたことでした。本当なら、こんなに訓練されているのですから、どこへでも自由に出入りできるはずなのですが、まだ世間の理解は十分でなく、ホールなどで入場を断られるケースがあるというのは悲しいことでした。実は申しわけないことでしたが、私のショーを見にいらした福沢さんを、あるホールの事務所の人が断

わったことがありました。あとで伺ってびっくりした私は、そのお詫びに、つぎの芝居のとき、福沢さんをお招きしましたが、それ以降、証明書のある盲導犬を連れた視覚障害者の方がいらした時は、必ずお入れするように、ホールの入口の人にお願ひしています。

福沢さんもおっしゃっていたことですが、白杖では歩くのが怖く、つい外出も控え、引っ込み思案になってしまふようです。それが盲導犬を手にしたことによって、初めての場所でもどこへでも、他人に気兼ねすることなく出掛けられ、生活の幅が想像以上に広がるということです。自分の足で歩いたという“実感”が得られ、「自分のことは自分でやれる」という自信が生まれ、ひいては自立につながっていくというお話でした。

今年は「国際障害者年」ですが、その時期に、日本で初めて盲導犬を育成し、普及に努力された塩屋賢一さんの半生記が、出版の運びとなったことは、大変意義深いことだと思います。これを機会に、一人でも多くの方が盲導犬に深い理解と愛情を持っていただけたらと、心から願っているわけです。

昭和五六年九月

黒柳 徹子

目次

序文

黒柳徹子

1 人が失明したとき	1
------------	---

銀座を歩く“二人五脚”……………1

一巻の終わりに思った……………8

まずあの喫茶店に行きたい……………14

盲人には狭い就職の門……………18

盲導犬は金持ちのものではない……………20

2 愛犬アスターとの生活	25
--------------	----

犬を飼いたいなあ………25

アスターの思い出………29

訓練士として身をたてる………34

手探りで始めた盲導犬訓練………40

「目から火が出る」は本当!………43

3 国産第一号チャンピイの誕生………48

喧嘩早さの矯正に手間どる………48

盲導犬第一号誕生の日………53

彦根で活躍するチャンピイ………58

結核に倒れ渡米を断念………62

足の引っ張り合いはやめよう………67

4 アメリカの施設を訪ねて………71

感銘受けたシーイング・アイ……………	71
心から歓迎された私……………	76
ドイツに発祥の地の面影なし……………	80
一ケタ少ない日本の盲導犬……………	86

5 犬のしつけ、訓練のコツ……………92

盲導犬に向いているラブ……………	92
親犬のしつけに学ぶ……………	96
訓練のコツは誠心誠意……………	99
犬に関するマナーの確立を……………	104
「利口な不服従」で危険を守る……………	109

6 盲人の“自立”を助ける……………114

幸せな“結婚式”を……………	114
----------------	-----

魚料理も工夫すれば食べられる……………	119
犬の世話はすべて自分で……………	122
自立で娘さんを幸せに……………	128
家に帰ってからが試練期……………	131

7 挫折の危機の中から……………136

若い指導員に裏切られる……………	140
息子の一言で気を取り直す……………	143
縁の下での力持ちⅡ指導員たち……………	147
質屋通いで年を越す……………	153
脳溢血で倒れる……………	157

8 犬とはなんと素晴らしい動物……………161

犬に託す私たちの願い……………	161
-----------------	-----

犬の英知で人知を拓く……………	165
楽しい犬との会話……………	168
青春を呼び戻した犬……………	172
アイメイトを手にしたとき……………	175
9 アイメイトに深い理解を……………	182
飼育奉仕者に心から感謝……………	182
ホールになぜ入れない……………	186
ありがた迷惑のときも……………	191
身障者の立場にたった道路を……………	194
私のユメ―二億円の基金……………	196
幸せな人生だった……………	199
あとがき……………	202

Ⅱ 一人が失明したとき

銀座を歩く “二人五脚”

きょうは盲人と盲導犬の卒業試験である。これまで四週間、犬と寝食をともにしてきた三人の盲人たちが、盲導犬を使って銀座四丁目の角・和光の前から京橋まで歩き、そこで横断歩道を渡って、また銀座・三越前まで戻るとというのが試験課題である。

昨年のように冷夏になるとの長期気象予報がはずれて、今年（五六年）はツユ明けが早く、明けたと思ったら連日の猛暑。七月一七日、太陽がカンカン照りつける中を、盲人たちはそれぞれの犬と一緒に “二人三脚” ならぬ “二人五脚” で試験コースを歩きはじめた。むろん、犬たちにとっては初め

てのコースだ。

私は銀座四丁目の角に立ち、うまく歩いてくれることを祈りながら彼らの出発を見守っていた。銀ブラする人たちはウインド・ショッピングを楽しみながら、文字どおりブラブラと歩いている。その間を「二人五脚」はうまくすり抜けながら、普通のスピードで歩いていく。「うまいぞ、うまいぞ、その調子」。私はそうつぶやいた。

ところが、Kさんが途中間違えて地下鉄の入口から階段を降りて行ってしまった。「もし道に迷ったと思ったら、三越前へ出るにはどう行ったらいいかを、通行人にききなさい」と予め言っていたし、私どもは簡単には手助けしないことにしていた。「どうなるかなあ」としばらく待っていると、やがてKさんが再び地上に現われた。やはり少し変だと気がつき、戻ってきたのだった。

こうして、無事、全員卒業試験をパスした。地下鉄のほうへ降りて行ってしまったという失敗は、彼にとっていい経験となっただろう。失敗は成功の母——それをやり通すことで、歩くことの自信がつくのである。

私たちは毎回、卒業試験をこの銀座コースで行なっている。きょうの三人に限らず、これまでこのコースを歩いた数多くの盲人たちは、異口同音に言う。

「ああ、天下の銀座を歩いた」

そういうことで、大きな自信になるようだ。

私たちの「東京盲導犬協会」がある吉祥寺から銀座まで数人の盲人と犬が出掛けるのは大仕事で、一時はもっと近くの場所で済まそうかと考えたこともあったが、彼らが喜び、その喜びがまた自信につながると思うと、他の場所へ移すことにためらいを感じ、ずっと銀座コースで行なっている。

無事歩き通した彼らは、汗をびっしょりかいていたが、その表情は明るく、「人にぶつかりそうになったがうまくよけて通った」とか、「二つ目の角で車が来たが、ちゃんと止まった」など、矢つぎ早に、いま終わったばかりの試験をむしろ楽しむかのように、よくしゃべった。私はその話をききながら

「よかった、よかった。バンザーイ」

と心の中で叫んだ。

何度となくこうした経験をしているのに、きょうもまた新鮮な感激を味わう自分を発見して、「この仕事はもうやめられないなあ。一人でも多くの盲人のために犬を育てよう」と、自分自身に誓うのであった。

私は戦後、ふとしたことから盲導犬を育てることになった。当時は文献もなく、自ら目隠しして文字どおりの「手探り」で始め、約一年を費やしてやっと犬を訓練することに成功した。しかし、道はまだ半ばであった。盲人と実際に歩いてみないことには、実用化できるかどうかなんともいえなかったからだ。そして一夏かけて盲人との歩行指導が開始された。二人の男が犬に変な道具をつけて歩く

姿は、道行く人の目には奇異に映ったであろうが、私たちは盲導犬誕生のために若いエネルギーをぶつけ合った。こうして第一号「チャンピイ」が誕生した。昭和三年の夏のことである。それ以来、多くの人たちに助けられ、また盲人たちの喜ぶ姿に勇気づけられ、盲導犬を育ててきた。きょう卒業した人たちは第二六一号から第二六三号の犬を手にした人たちである。

犬との歩行指導を始めて三日目に「もう盲導犬なんてやめたい。家に帰りたい」と泣き出したKさんも、それがウソだったかのように、きょうは陽気にしゃべった。あすは自宅のある相模原に帰るが、「これまで行きたいと思いながら行けなかったところへ、犬と歩くんだ」と、あすから始まる新しい人生に大きなユメを膨らませていた。

人は中途失明したとき、だれしも一度は自殺の「誘惑」に襲われるという。人間の生活において、目は九〇%の役割をはたすといわれるだけに、なにかも失ったように感じるからだろう。もしいま、自分の目の前から家族の顔、さまざまな物の形や色、そして人々の動作が消えてしまったらと考えると、だれでも恐怖のどん底に突き落とされた気持ちになるに違いない。ケガで失明した人、病気が原因の人、若い人もあれば年寄りもあり、また一家の柱であることもあるが、それぞれに前途を悲観し絶望する。

ところが、その打ちひしがれた盲人の心に明るい光を灯し、生きる喜びをもたらしてくれるのが盲導犬—アイメイト (Eye mate) である。犬には不思議な力がある。言葉数の少なかった人がよくし



バスから降りる盲導犬

やべり、よく外出するようにもなる。それとともに表情が明るくなる。友だちもふえ、さらに元気が出てくるというわけだ。

人間にとって歩くということは基本的な欲求の一つである。先天性、後天性の別なく視覚障害者は「読めない、書けない、歩けない」という問題を抱えている。このうち読む、書くことについてはオプタコン（読書機械）、カナタイプ、点字、テープレコーダなどで、ある程度カバーできるが、歩行に関しては基本的な欲求であるにもかかわらず、もっとも制約を受けている。

盲人の歩行手段としては白杖が一般的だが、安全性の面で劣るために行動半径も狭く、スピードも遅い。しかも、神経を極度に集中して歩くため疲労度も高い。また一

人で歩くためか孤独感が伴い、性格的にも引込み思案になりやすい。

また、親、兄弟あるいはヘルパーと呼ばれる人の肩をかりて歩く方法もあるが、相手の都合もあって自分が外出したいときに出掛けられないし、相手への気がねもつきまとう。それにいまの日本では、まだ盲人を連れて歩くときの世間の好奇な目を意識しないわけにはいかず、とかく外出を差し控がちである。盲人の娘さんを抱えた人が、世間の目を逃れるために、何年もの間、娘さんを家の中に閉じ込めていたという、信じられないような話もあるくらいだ。

そのほか、補助手段として超音波メガネやロボットなどの研究もされているが、まだまだ実用化にはほど遠い。

その中で、盲導犬による歩行は安全であるばかりか、他人に気がねなく出掛けられる。そしてなによりも、家にいるときは犬と一緒にあるために孤独感がなくなるし、外出中は犬を仲だちとして、多くの人々が気軽に声をかけ、受け答えしているうちに行動も積極的になり、一般社会との交流が自然と生まれる、という大きな効果がある。

ちょうど、よく電車の中でかわいい赤ちゃんをあやしている母親に、見知らぬ隣りの人が話しかけると似ている。

「まあ、かわいいこと、おいくつ？」

「もうすぐお誕生です」